

# 第1学年音楽科学習指導案

日 時 令和5年2月24日（金）3校時

対 象 第1学年2組

授業者 宮城教育大学附属中学校

教諭 板橋 薫

## 1 題材名 歌詞が表す情景を想像して歌おう

## 2 題材の目標

- (1) 「花」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解するとともに、創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付ける。
- (2) 「花」のリズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、「花」にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。
- (3) 「花」の歌詞が表す情景や曲の味わいに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組むとともに、我が国で長く歌われている歌曲に親しむ。

## 3 題材について

### (1) 題材について

本題材は、中学校学習指導要領音楽科第1学年の目標に向かい、「A表現」の次の内容に依拠する。

ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫すること。

イ(ア) 曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わり

ウ(イ) 創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能 これらの具現化を図るために、歌唱共通教材として中学校学習指導要領に示される7曲の中から『花』を取り上げ、全3時間の授業を行う。歌唱共通教材は、我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるものとして選曲され、我が国のよき音楽文化が世代を超えて受け継がれていくようにするという観点でその指導が位置付けられてきた。この趣旨を鑑み、作品の価値を踏まえながら曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫させる。〔共通事項〕に関しては、「音楽を形づくっている要素」の中から「リズム」「旋律」を重点化する。

### (2) 生徒の実態

本学級は明るく朗らかな雰囲気を持ち、男女分け隔てなく率直に意見を伝え合う姿の見られる集団である。本題材に関連する歌唱の学習活動としては、本校の学校行事である合唱祭に向け、9月から10月にかけて混声合唱に取り組んだ。第1学年ということで、小学校段階で経験した「同声合唱」から、今回はさらに声域の広がった「混声合唱」であるということを経験したことに確認し、混声合唱曲『COSMOS』を教材として混声三部合唱の練習をした。曲全体の中での役割を意識し、より良いバランスを考えながら美しいハーモニーを作ろうとすることに粘り強く取り組む姿の見られた学級集団である。学習過程における課題としては、創意工夫を生かした歌唱表現を習得していく過程において、「より良い表現」を「全体的に声量の豊かな歌い方」と捉える様子が見られた。そ

のため、「より良い状態」を声量の問題だけでなく捉えられるよう、3パートでのより美しいハーモニーのバランスを感じ取らせたり、より美しい響きを作るための身体の使い方を試させたりすることなどを適宜取り入れながら授業を展開した。

### (3) 指導に当たって

指導に当たっては、中学校学習指導要領音楽編で示される7つの歌唱共通教材の中から、『花』（武島羽衣作詞、滝廉太郎作曲）を用い、歌唱共通教材の趣旨を踏まえて題材の目標に向かう。「現代」の礎が築かれた明治時代に生まれた歌と生徒たちが出会うことを通して、その作品の何が人々にとって新しかったのかを想像しながら作品の価値を捉え、美しい情景に思いを馳せながらのびやかな歌唱表現をさせたいと考え、3時間構成を図ることとした。

『花』は、明治33年（1900年）10月に刊行された組歌『四季 花、納涼、月、雪』の第1曲であり、滝廉太郎が芸術歌曲として作曲したもののなかで初めての通作歌曲として位置付けられている作品である。滝廉太郎の生きた時代（明治12年～明治35年）は、明治政府による文明開化の政策の一環として、西欧の曲に日本語の詩を付けた歌や、西洋の七音音階を使用した「唱歌」を用いた音楽教育が展開されていた。その潮流の中で、西洋の音楽文化と日本語特有の味わいと融合を深化させ、芸術としての領域に発展させていこうと試み続け、生まれた作品が『花』や『荒城の月』などである。海老澤(2004)は『花』について次のように述べている—「とりわけ顕著なのはまだ当時素朴で自然に恵まれていた東京、おそらくは江戸時代の雰囲気がおおまかには切っていない領国界隈の隅田川の音表象を、日本近代音楽史上、およそ初めて実現することに成功したであろう。日本的情緒を初めて西洋的な芸術歌曲形式の鋳型に注入し、その方式に学びつつ、しかもただ日本人にしてのみ可能な変容をも試みつつ、質的にも最高の日本近代歌曲を創造した奇蹟とも、それは位置付けられる」。

今日まで歌い継がれていることの価値を中学生の生徒たちが自分なりに捉えようとするために、本題材では次のとおり2点の具体的手立てを講じる。

1点目は、題材全体の導入として日本の大衆音楽の変遷をたどることにより、1900年頃の人々が持つ音の感覚と現代の感覚との差異を推察させる。生徒たちが教材曲に出会う前にこうした段階を経ることで、様々な時代の中で人々が音楽（ここでは歌に焦点化する）にどのようなことを求めていたのか想像し、『花』の生まれた1900年という時代と今とを照らし合わせたり、結び付けたりしていくきっかけとしたいと考えた。

2点目は、本楽曲が西洋音階を用いた二部合唱として作られていることを生徒たちが知ることを通して、五音音階による旋律と七音音階による旋律との感覚的な違いを味わわせる。生徒を含め、現代を生きる私たちにとって、ドレミファソラシドという音階の感覚は違和感の生じないものであろう。このような共通の感覚が、共通の感覚でなかった頃があるということに着眼させることにより、今当たり前のものが当たり前でなかったときがある、ということを認識させたいと考えた。

なお、歌唱共通教材の中には同じく滝廉太郎の作曲した『荒城の月』も含まれるため、同様の趣旨で『荒城の月』を扱うことも可能であるが、第1学年として初めて歌唱共通教材を扱うに当たっては、明るく快活な印象を受ける『花』を取り上げることとした。本題材に取り組むことで、今後他の歌唱共通教材に出会う際にも、作品の価値を探ろうとする探究の礎を築きたい。

#### 4 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>『花』の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解している。</li> <li>創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌うための技能を身に付けている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『花』のリズムや旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、歌唱表現を創意工夫している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『花』の歌詞が表す情景や曲の味わいに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。</li> </ul>

#### 5 指導と評価の計画（全3時）

時	◆ねらい ○学習課題 ・学習活動	知・技	思	態
		〈 〉 内は評価方法		
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 様々な年代に生まれた日本の大衆音楽を聴くことを通して、現代の日本の歌と約100年前の日本の歌との印象や曲調の相違を感じ取り、その相違の根拠を考察する。</li> <li>○ 日本のうたをさかのぼろう <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 昨年最もヒットした日本の歌のランキングをクイズ形式で2種類提示する。</li> <li>・ 2010年のヒット曲を皮切りに、10年ずつ遡りながらその年に日本で最も流行した歌を視聴する。</li> <li>・ 1910年代の歌まで聴き、現代の歌と比較したり、日本の約100年間の大衆音楽の変遷を考察したりする。</li> </ul> </li> </ul>			↓
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 『花』の各声部のリズム及び旋律を覚え、その練習の中で曲想と歌詞の内容を味わうことを通して、それらの関わりについて理解する。</li> <li>○ 『花』について知ろう <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 西洋（七音）音階が用いられた二部合唱曲であることを知り、五音音階の響きとの違いを感じ取る。</li> <li>・ 歌詞に出てくる言葉の意味やイメージを確認しながら、各声部が歌えるように練習する。</li> </ul> </li> </ul>	[知] 〈観察・楽譜への書き込み〉		↓
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 主体的・協働的に曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫し、全体の響きや各声部の声などを聴き、歌詞が表す情景を想像して仲間と合わせて歌う技能を身に付けることを通して、『花』に親しむ。</li> <li>○ 歌詞が表す情景を想像して歌おう <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歌詞が表す情景を想像し、曲にふさわしい歌唱表現をするにはどのように歌うのがよいか考え、練習する。</li> <li>・ 他声部との響きを味わいながら、二部合唱を楽しむ。</li> </ul> </li> </ul>	[技] 〈観察〉	[思] 〈フォーム・観察〉	[態] 〈観察〉

## 6 本時の指導に当たって

### (1) 第2時のねらい

『花』の各声部のリズム及び旋律を覚え、その練習の中で曲想と歌詞の内容を味わうことを通して、それらの関わりについて理解する。

### (2) 本時の評価

評価規準	Aと判断する生徒の姿	Cと判断する生徒の姿及び手立て
『花』の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解している。(知識)	春の快活な印象の根拠となる箇所を探し、楽譜に書かれている音や歌詞を丸で囲んだり言葉で書き込んだりするだけでなく、歌って試したり他者との意見交流を積極的に行ったりすることを通して考えたことの検証に努めている。	学習課題が把握できず、休符の箇所を探すことができない。 → 休符の箇所を探す前段階として、教師と周囲の座席の仲間とで一緒に主旋律を歌い、活動しやすい(歌いやすい)集団の雰囲気を作る。

### (3) 指導過程(第2時)

学習活動	○ 指導上の留意点 ◇ 評価
1 常時活動	○ ストレッチや発声練習を行う。
2 『花』を聴き、作品の生まれた頃は人々にとってこの作品のどのような点が新しい響きだったかを考える。 ① 『花』を聴く。 ② 西洋音階が用いられていることと二部合唱曲であることを知る。	○ 前時の復習をした上で、前時に聴いた作品よりも前にあたる1900年に生まれた作品について学習することを伝える。 ○ 楽譜を配った後、音源のみで提示する。 ○ 『花』が音階の第4音と第7音を除いた旋律で作られていた場合、どのような響きになるかを例示する。それによって西洋音階が用いられていることによる響きとのちがいを感じ取る。
3 高声部の練習をする(1番)。	○ 高声部を教師の模範唱に沿って練習し、リズムや旋律の動きをおおまかに捉えて歌えるようにする。
4 低声部の練習をする(1番から2番)。	○ 全員で低声部の練習をする。1番の練習に続き、主旋律となる2番も練習する。
5 16分休符や8分休符が生かされているリズムの箇所を探し、歌詞とそのリズムや旋律の動きを照らし合わせて休符の意図を探る。	○ 16分休符や8分休符の箇所を楽譜から探し、丸で囲むことをしながらその箇所を歌って試すことを通して休符の働きを感じ取る。また、歌詞を読むことを通して、「春」の情景の比較的明るい雰囲気や隅田川でのレガッタの生き生きとしたイメージを想像したり写真等で確認したりしながら、作品の持つ快活な印象の根拠となる箇所を探し、楽譜に書かれている音や歌詞を丸で囲んだり言葉で書き示したりさせる。 ◇ 『花』の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについてについて理解している。
6 本時のまとめとして、任意の声部で2番まで通す。	○ 任意の声部を選び、本時の学びを踏まえて一度通して歌う。

## 7 参考文献

- ・ 「瀧 廉太郎—夭折の響き—」 海老澤敏 2004 岩波書店